《ソードアート・オンライン》 -転生した主神（笑）-

BRISINGR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《ソードアート・オンライン》　－転生した主神（笑）－

【Ｎコード】

Ｎ９７５２Ｚ

【作者名】

ＢＲＩＳＩＮＧＲ

【あらすじ】

《はじまりの街》で茅場晶彦が《ＳＡＯ》のデスゲーム開始を宣言した。１万人のプレイヤーの１人である俺、ディン（偽名）は転生者だ。原作知識もある。あと、エクストラスキルも持ってる。とりあえず、死なないように生きていきたい。

1―1　デスゲーム、開始（前書き）

思い付きで書き始めた作品です。
よろしくお願いします。

1―1　デスゲーム、開始

突然だが、ここはどこだ？。
いや、だって、昨日、普通にベッドで寝てて、目が覚めたら知らないところにいるんだからな。

周囲を確認。
たくさんの建物がある。どこかの街なのかな？そして、俺がいる場所はその街の広場みたいなところ。
人もいる。それも全員美形、男女問わずだ。見たところ、不細工なやつなんて1人としていない。金髪、青髪、赤髪、黒髪、等々と色々な髪の種類がある。全員、似合ってるし。
正直なところ、凄いムカつく。これは、平凡（だと思いたい）な俺に喧嘩を売ってんのか。

いやいや、待て待て。
それよりも現状把握だ。とにかく、ここがどこかが先決だ。

ってか、人、多くないか？広場だってのに人口密度が高い。肩と肩をぶつけるほどではないが、それに近いものがある。

「クソっ！何でログアウトできないんだよ！」

ふと見ると、斜め前にいる青髪の青年（もちろん、美形）が空中に浮かぶ紫色の板に指で連打していた。その板には何も書いていないのにだ。

あの紫色の板は何？それに、ログアウト？

「どうなってんだ？」

「アナウンス無しの転移（テレポート）なんて珍しいな。何かのバグか？」

「早くログアウトさせてくれよ！」

「状況を説明しろ！」

周りに喧騒が広がっていく。罵声も聞こえてきた。
俺には何がどうなってんのか分からない。

「あっ……上を見ろ！」

喧騒よりも大きな声が誰かが叫んだ。
俺はもちろん周りの人も声に従って、反射的に視線を上に向けた。

上空１００ｍ辺りの天井を（今更だが何で天井があるんだ、ここは外だろ）真紅で染められた２つの英文が交互に現れ市松模様に染め上げた。

【Ｗａｒｎｉｎｇ】
【Ｓｙｓｔｅｍ　Ａｎｎｏｕｎｃｅｍｅｎｔ】

え、英語？ここって異世界じゃないの？
俺が驚いている傍で広場のざわめきが治まっていく。
何でみんな安堵の表情浮かべてんの？明らかにおかしいでしょ？訳が分からない。さっきの紫色の板といい、上空に浮かんでいる英語といい、どうやって浮かんでんだって話だ。

不思議な現象はそれだけで終わらなかった。

隙間なく埋める真紅に染められた天井の中央部分から、どろーりと真っ赤な液体が落ちてきた。ゆっくり落ちてくる液体は、空中でその形を変えた。

この世界は重力というもの知らないのだろうか、と俺は真剣に真面目にそう思った。

形を変えた液体は、身長２０ｍくらいの真紅のフード付きのローブを着た巨人の姿になった。

もう俺は驚かない。

例え、目の前にいる巨人に顔が無くてもだ。

「ありゃ、ＧＭ（ゲームマスター）じゃねえか？」

「何で顔が見えないの？」

「気持ち悪〜い」

そんな囁きが周りから聞こえてくる。

不意に、巨人のローブの右袖が動いた。左袖もゆっくり掲げられた。左右のローブから純白の手袋が俺の上で広げられた。

ところでさ、俺、どっかであの巨人見たことがあると思うんだ。どこだっけな〜？

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

誰が喋ったのか分からなかった。でも、状況を察するに目の前にい

る巨人が喋ったのだろう。
ああ、顔無しの巨人、口が無いのにどうやって喋ったのか教えてくれ。
『私の名前は茅場晶彦（かやば あきひこ）。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』
その言葉に俺は脳天から雷を受けるような衝撃を受けた。
マジ！？今、何て言った！？
茅場晶彦！？
ああ！思い出した！あの巨人のローブ姿は文庫の挿絵じゃん。だから、見たことがあったのか、うんうん。
って、そんな頷いている場合じゃねー！

もう状況は理解したたぞ。
ここは《ＳＡＯ》の世界だ。そして、俺がいる場所は第１層にある《はじまりの街》の広場。
だから、みんな、ログアウトとかＧＭ（ゲームマスター）とか言ってたんだな。

……うわー！恥ずかしい！
今までの状況にツッコんでた自分が恥ずかしい！
この世界は重力を知らない？
馬鹿！ここは電脳世界なんだから何でもアリなんだよ。

『プレイヤー諸君は、既にメインメニューからログアウトボタンが消滅していることを気付いていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、《ＳＡＯ》本来の仕様である』

ここから長々と説明が始まるが、俺は知っているので聞き流すことにした。

つまり、あれだろ？
自発的なログアウトはできない、外部からのナーウギアの停止は不可能。もし、外部からナーウギアの取り外しがやられた場合は、えっと……脳に電気を流す？

『――ナーウギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

そうそう、それ。
次に、ＨＰが０になったときは現実世界にある自分の脳がナーウギアによって破壊。つまり、死亡。
あとは、ずっと家で寝たきりって訳には行かないから、病院に搬送される時間を考慮して２時間の猶予時間がある。

現実世界にある俺の身体、大丈夫だよな？ちゃんと、病院に搬送されてるよな？
いや、でも俺もう明らかに転生者だからな。現実世界に肉体があるのかも怪しいぞ。アバターに憑依ってか？勘弁してくれ。

最後に、俺たちプレイヤーが現実世界に戻るための条件は１つ。アインクラッド最上層、第１００層の《紅玉宮》のラスボスであるヒースクリフを倒すこと。

まだ茅場晶彦の説明が続いている中、俺は呆然と上を見る人混みを抜け、広場から出た。
とりあえず、俺が１番乗りで動いているのは間違いない。他の人は突き付けられた現実を整理中だからな。

とは、言っても、他のプレイヤーみたいに俺にはあまりアドバンテージは無い。
原作知識があるとは言え、戦闘経験は皆無。キリトみたいに剣道の経験があるわけでもないから、死ぬときは死ぬ。それに、原作知識はデスゲーム開始から2年後の話だ。今の時点であまり役立つとは言えない。

そういや、キリトと接触するか？まだ、あの人混みの中だよな。
うーん、まあ、いいや。原作キャラとの接触はまたの機会にするか。とりあえず、確定事項は、リズベットの店とエギルの店の常連客になろう、うん。
原作キャラとは、仲良くしたいし。せめて、現実世界でエギルの店に呼ばれるくらいにはなりたい。

あーっと、そうだ。
俺は空中で指を振り、紫色の板であるウィンドウを呼び出した。
俺ってば、自分のアバターの名前も知らないんだよな。もちろん、ウィンドウのメインメニューには自分の名前が映し出されていた。ちゃんと、他人に見られないように不可視状態にしてある。

Ｏｄｉｎ。

オーディン。
誰だ！こんな厨ニ病の名前をつけた奴は！俺は神じゃねえぞ、ゴラ！！
肩で息をしつつ、次にアイテム欄を確認……バリバリの初心者でした。まあ、当たり前。
スキルの方はっと……何これ？俺が目を見張ったのは、レベルアップによって習得可能スキルが増える《スキルスロット》の欄にある１つの枠。

まだレベル1だから1つしかないと思っていたのだが2つあった。
これはいい。1つは、初心者装備である片手剣を持っているためなのか、片手直剣スキルが埋まっている。
そして、もう1つが、

これ、エクストラスキルなんじゃね？

全10種しかないエクストラスキルだ。
名前だけでエクストラスキルと分かるのか、と言われれば微妙だ。
でも、このスキルの名前からしてエクストラスキルと判断してもいいんではないだろうか。あまり自信は無いけど。
とにかく、このスキルは外せない。
何であるかなんて知らない。良くあるテンプレみのチートのような気もするが、使えるものは使おう。

まずは、武器屋だ。今、持っている片手剣を売って『あの武器』を購入しよう。そしたら、片手直剣スキルを消して、代わりに『あの武器』のスキルを入れる。
《スキルスロット》は2つしか無いんだ、無駄なスキルは入れられない。

『それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え』

広場の外まで聞こえる茅場晶彦の声。もう説明は終盤に差し掛かっている。

ウィンドウを《スキルスロット》からアイテム欄に変えて、所持品リストの1番上にある手鏡をオブジェクト化させた。

この手鏡を使わなかったら、現実世界の顔には戻らず、ずっとイケメンの顔なのだろうか、と一瞬の期待が過ぎったが、手鏡に映る自分を見て淡い期待であると痛感した。

自分と同じ顔……！

つまり、手鏡をやるまでもなく、俺は現実と同じ顔なのだ。今の今まで周りイケメンなのに、俺だけ平凡だったのか。泣きたくなってきた。

突然、光が俺を呑み込み、視界がホワイトアウトした。２，３秒後に光は消えて、手鏡に映るのは、さっきとあまり変わらない自分の顔。手鏡を地面に落として壊し、手鏡をアイテム欄から消す。

広場からざわめきが聞こえてくる。アバターが現実世界の自分と同じ顔になったから、驚いているのだろう。

俺はそれらの喧騒に背を向けて、近くにあるＮＰＣが経営する武器屋へと入った。

『……以上で、《ＳＡＯ》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の――健闘を祈る』

1―2　赤鼻のトナカイ（裏）

デスゲーム開始から5ヶ月が過ぎたけど、俺はまだ生きている。今やキリトと同じくソロの攻略組プレイヤーとして頑張ってる。
今の最前線はまだ第５０層より全然下の層のため、エギルの店やリズベットの店はまだ無い。シリカには接触してはみたが、俺より会う前の野郎共のせいで少し男嫌いになってしまったみたいで、あまり話せなかった。残念。

ところで、俺のフレンドリストには誰1人として名前が載っていない。この『オーディン』という名前のせいだ。恥ずかし過ぎる。とりあえず、攻略メンバーやキリトには『ディン』と名乗ってごまかしている。
プレイヤー間のアイテム交換は全部避けている。互いのプレイヤー名が映るからだ。買い物はＮＰＣのいる店で済ましている。どうしてもやらなくてはいけないときは、俺は1回オブジェクト化させて、目の前で交換するようにしている。お金も然り。
お金をオブジェクト化ってかなり危なっかしいんだよね。プレイヤーならその場で奪って、敏捷力にものを言わせて逃走なんてこともできる訳だからな。

閑話休題。

今は２０２３年4月。
キリトがギルド《月夜の黒猫団》に入る月だ。

俺はサチを救う。

理由？可愛い女の子が死ぬと分かっているのに、黙って見過ごせる

か馬鹿め！
……コホンッ、失礼。
とにかく、俺はサチを救いたい。ついでに他のメンバーも救えることなら救う。
当然のことながら、ヒロイン優先だ。
でも、俺は原作崩壊をあまりしたくはない。原作崩壊させて取り返しの付かないことになったら嫌だからな。よくあるパターンだと、原作キャラが死ぬとかヒロインが主人公ではなく自分を好きになるとかか。
原作だと、サチもキリトを好いていた節があるから、ここはキリトのハーレムメンバーになってもらおう。
唯一気掛かりなのが、死んだサチのために、《背教者ニコラス》を倒し蘇生アイテムを手に入れること。その過程でキリトががむしゃらにレベル上げをするのだが、人の命が懸かっているのだから、背に腹は変えられない。

『影ながら援護して、サチはキリトが守りましたよ作戦』

これが俺の作戦名である。作戦名に関してはあまり突っ込まないで欲しい。

問題は、いつキリトが《月夜の黒猫団》に入るか。そして、その《月夜の黒猫団》がどの階層を狩場にしているかだ。

1番簡単なのは、サチが死ぬ場所である最前線のいくつか下の層にある迷宮区で待ち構えることなのだが……そう。いくつか下なのだ。つまり、覚えていない。この案は没。
次の手として、キリトが武器の素材の収集で下の階層———つまり《月夜の黒猫団》がいる階層に行くときに一緒について行くことだが、これは難しい。キリトは基本ソロで動くため、一緒に動くのは

断られるかもしれない。追跡するにしても、いつ下の階層に行くか分からないので、パス。
え？メッセージを送ればいいじゃないかって？それをしたら、キリトが怪しんで行かないかもしれないし、時期がズレて《月夜の黒猫団》に会わない可能性も出てくる。それこそ、原作崩壊だ。
そもそも、俺はキリトにメッセージを送れない。メッセージを送るには、互いにフレンドリストに名前を登録しなければならないからだ。オーディンなんて名前を知られたくないし、恥ずかし過ぎる。
でも、キリトくらいなら知られてもいいかな、今日この頃。
一応、同じソロの攻略組だから仲は良いんだけどな。

閑話休題。

結論。
《月夜の黒猫団》を捜し出して、監視と追跡が有効。

◇◆◇◆◇◆◇◆

調べてみたら、総合掲示板に『ギルド《月夜の黒猫団》、前衛募集中』と書いてあって、あっさりと《月夜の黒猫団》の所在地が分かった。
そこからは、監視あるのみだ。とは言っても、夕方の転移門を少し監視するだけで済む。この時間に、キリトは《月夜の黒猫団》と一緒に迷宮区から入ってくるからだ。
俺は拠点をこの階層に移して（宿屋にチェックインするだけだが）監視を続けた。宿屋は窓から転移門が見える場所にした。
うん。サチがいることを確認っと。

◇◆◇◆◇◆◇◆

あれから十数日。
俺は夕方を除いた、朝に低層フロアで武器の素材集めして、昼と夜にレベル上げをしている。自分がレベルホリックになっているのは重々承知しているが、この世界においてデメリットになるわけでもないので、ひたすらレベル上げをしている。
攻略組のメンバーのレベルがどこまで行っているのか知らないが、いいところまで行っているとは自負している。

デスゲーム初日に気付いたエクストラスキルらしきスキルも順調に熟練度を上げている。まだ誰にも見せてはいない。
いつ人前で使うかは決めてはいないが、キリトと1対1で戦うときにでも使おうかとか、グリームアイズの時とか、適当に考えている。

おおっと来た！
キリトが《月夜の黒猫団》と一緒に歩いている。そのまま、酒場まで行くようだ。
よし、作戦開始だ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

そこからは、キリトと《月夜の黒猫団》を監視と追跡。
ああ、もうストーカー行為みたいになってるけど、読者の皆さん許して下さい。ヒロインを守るためなんです。

新たに浮上した問題が、いつ『その日』が来るか。こればっかりはどうしようも無いので監視と追跡を続けるしかなかった。

迷宮区の追跡は困難を極めた。キリトは索敵スキルを持っているので、俺の索敵スキルの索敵可能範囲ギリギリ内側に入るようにしなければならなかった。近すぎても、キリトの索敵可能範囲に入り、遠すぎても俺の索敵可能範囲外に出てしまう。もし、俺よりキリトの索敵可能範囲が広い可能性もあるのだが、その時はその時である。2，3日過ぎたあたりで、いきなりキリトと思わしきプレイヤーが物凄いスピードで俺に向かって走ってきたことがあった。もちろん、俺はその場でUターンして全速力で逃げた。あれは本気で焦った。

そして、遂にキリトと《月夜の黒猫団》が酒場にしているところで、盗み聞きした話だと、ギルド資金がそろそろギルドハウス向けの一軒家が買えるくらいになるとのことだった。

『その日』が来るのは近い。

◇◆◇◆◇◆◇◆

やっと『その日』が来た。

いつもの酒場で《月夜の黒猫団》のリーダーであるケイタがギルド資金を持って、不動産仲介プレイヤーのところに行った。酒場に残ったキリトと《月夜の黒猫団》のメンバーは、ケイタが帰ってくる前に迷宮区で金を稼いで、新しい家具を全部買い揃えようという話になった。

転移門に向かうキリトと《月夜の黒猫団》のメンバーたち。俺も自

然を装いながら転移門に行く。
キリトが階層の名前を言うと、キリトを含めた《月夜の黒猫団》が全員転移した。
俺も傍で階層の名前を聞いていたため、最前線から3つ下かーと思いつつ、その階層の名前を言って転移した。

◇◆◇◆◇◆◇◆

さて、キリトたちを見失った。
迷宮区に入ったまでは良かったのだが、実はこの階層に入るのは初めてなのだ。
初めて入る階層に多少の緊張を覚えながらも、足を進めた。キリトたちを見失わないように一定の距離を保って歩いていると、

ガチャコン！

いきなり足を乗せた床の石が沈んで、何か不吉な音が鳴った。
マズい！と思った俺は身構える間もなく、視界が真っ白になった。
2秒後に視界が開けた。何が起きたのかは飛び込んでくる風景を見れば分かった。
ランダム系強制転移トラップ。
迷宮区にあるトラップで、このトラップに引っ掛かったプレイヤーを迷宮区の何処かに強制転移させるトラップだ。転移する場所は、迷宮区の入口だったり、はたまた迷宮区の奥地だったりと色々だ。
たまに、瀕死なプレイヤーが迷宮区の入口に転移することを願って、わざと引っ掛かることもあるのだが……っとと、こんな話をしている場合ではない。

早くキリトたちを捜さなくちゃ。
一応、ＨＰバーを確認したが減った様子はない。

その時。
アラームトラップの音が鳴り響くのが聞こえた。
キリトたちが引っ掛かったのだ。
すぐに、悟った俺は音の鳴る方向へ全速力で駆け出した。

右に左に右に……いくつも角を曲がりながら辿り着いた先にはモンスターの波がごった返していた。アラームトラップがけたたましく鳴っていて、キリトが上位ソードスキルを必死に振るいモンスターを蹴散らしていく。それでも《月夜の黒猫団》のメンバーは守ることはできない。
残っているのはキリトとサチの２人だけ。他のメンバーは死んだのだろう。
モンスターの数が多過ぎるのだ。さすがの俺でも命の危機を感じた。

でも、それでもサチは救う。
１度決めたことだ。最後までやり通す。

俺は左手に持ったアイアンランスを目一杯の力を込めて、サチの目の前にいるモンスターに向かって投げた。

貫通直射投槍技《レボーブ・ニードル》。投げた槍を回転させて貫通力を増させるスキルだ。
投槍スキルは、その名の通り、槍を投げるスキルだ。槍を扱っていれば、自然と出てくるスキルなのだが、かなり不評だ。槍は他の武器と比べて耐久力が低い、相当丈夫に加工した槍でもない限り投げた槍はモンスターを突き刺さった瞬間、もしくは貫いた瞬間に耐久力を持っていかれて、ポリゴンへと霧散してしまう。もし、投げで

耐えられる槍でも、投げた槍が勝手に手元に戻ってくることなどある訳ないので、自分で拾いに行くしかない。モンスターが闊歩するフィールドの中をだ。危険過ぎるだろう。このデスゲームにおいて、かなり致命的な欠陥スキルとも言える。とは言っても、俺が使用しているわけだが。

投槍スキルは投剣スキルとは違い、敏捷力の他に筋力値も関係してくる難儀なスキルだが、ものは使い用だ。

ちなみに、投槍スキルと投剣スキルの違いは投げるオブジェクトの長さで決まる。１ｍ５０ｃｍ以上だと投槍スキルで、１ｍ５０未満だと投剣スキルとなる。消耗品である投擲用ピックが使えないのも不人気の原因の１つだろう。

投げたアイアンランスは回転しながら、３０ｍ先にいるサチに襲い掛かろうとするモンスターを３体一気に串刺しにしてモンスターと一緒にポリゴンと化した。耐久力が槍の中で低い方なので、霧散することは承知。

サチは目の前でモンスターが消え失せたのにビックリして顔を固まらせているが、キリトに手を引っ張られて、キリトの背に庇うように移動された。うん、終わるまでずっとその姿勢でいてくれ。万が一、投げた槍が当たる訳にはいかないからな。

俺はアイアンランスを左手で投げた傍らで、右手でウィンドウを呼び出し新たにアイアンランスを左手にオブジェクト化させた。それをまた投げる。

キリトもバッサバッサとモンスターを俺以上のペースで屠っている……って当たり前か。

それから、俺は２０本のアイアンランスを失いながらも、モンスターを全て片付けた。気付いたときには、アラームトラップも止まっていた。

サチは緊張の糸が切れて安堵したのか、キリトに抱き着いて泣き始

めてしまった。キリトは苦笑いしながら、自分の腕の中で泣くサチの頭を撫でている。
その光景に少なからず憎しみを覚えたが、自分が望んでやった結果だ。まあ、いいだろう。

キリトの目が不意にこちらを向いた。
ヤベ！飛んでくる槍の方向から感づいたのか。
こっちに視線が向く前に、俺はまた敏捷力全開にして来た道を駆け出した。

とりあえず、見られても大丈夫なように白い仮面と黒色のフード付きのローブを着てたから気付かれてはいないと思う。
投槍スキルを使うプレイヤーは珍しいが、常日頃から使っているわけでもないので俺だと特定される心配はない。というか、この日のために秘匿にしてきたのだ。気付かれるわけがない。

とにかく、洞察力の高いキリトに気付かれることはないし、サチは助けた。
作戦、終了。
お疲れ様でした。

1―2　赤鼻のトナカイ（表）（前書き）

明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

1―2　赤鼻のトナカイ（表）

俺が《月夜の黒猫団》に入ってから、迷宮区を歩くときに誰かの視線があるのは感じていた。
所謂、第六感ってやつなのだが索敵スキルをやってみると、案の定、1人のプレイヤーが俺の索敵可能範囲ギリギリのところを出たり入ったりしていた。自分の索敵可能範囲をギリギリのラインのところに俺たちを収めようとしているのだろう。だとしたら、こいつは索敵スキルの熟練度がほぼ俺と同等だ。
この行為は、俺を攻略組プレイヤーと知りながらの警戒する行動か、それとも、ただ単に用心深いだけなのかは分からない。
どちらにしろ、人を尾行しているのだから、何か企んでいる間違いないだろう。
ＰＫ（プレイヤーキル）をするにしても、あっちは1人。こっちは俺を含めて6人だ。
負ける気はしない。

本当なら、他のメンバーにも話して警戒してもらいたかったのだが、今の俺は皆よりちょっとレベルが上のプレイヤーということになっているので、話すに話せなかった。

最初の2，3日はＰＫ（プレイヤーキル）の線で考えていたのだが、それを過ぎてからはＰＫ（プレイヤーキル）という考えは捨てた。例えそれが目的だとしても時間をかけすぎだ。普通は1，2日で決行する。
4日目にサチたちがアイテムの採集に気を取られている間に、索敵可能範囲ギリギリにいる尾行者に向かって全力で走った。
その面を拝ませてもらおうか、と思ったのだが、予想以上に尾行者の敏捷力は速かった。たぶん、俺と同等かそれ以上だ。結局、距離の差は縮められずにサチのところに戻ると、

「急にいなくなるから、心配しちゃったよ？どうしたの？」

「なんでもない。ちょっと珍しいモンスターを見かけたから、追いかけてただけだよ」

蝶々を追いかける少女を少し捻ったような解答をした。

それからも尾行者は俺たちのことを尾行し続けた。何かをするわけでもない。ただ、索敵可能範囲のギリギリのところにいるだけ。

新手のストーカーか。

考えられるのはそれだけだった。だとしたら、誰が目的なのだろうか。尾行者が男か女かかも分からないため、《月夜の黒猫団》の全員が候補に挙げられる。

待てよ。俺が《月夜の黒猫団》に入ったときに、尾行者が現れたのなら、俺が対象ということも考えられる。いや、待て待て。たまたま、俺が索敵スキルを高かったせいで、これまで尾行してた奴に気付いただけなのかもしれない。

色々と可能性はあるが、ここは様子見ということにしておこう。

◇◆◇◆◇◆◇◆

サチが宿屋から消えた。

ギルドメンバーを総動員で捜し回った。俺の頭の中には、もし、サチが1人で《圏外》に出ていたら、尾行者に襲われるかもしれないという一抹の不安があった。その後、索敵スキルから派生する上位スキルの追跡スキルで、すぐにサチの居場所が主街区の外れだと分かり、安堵した。主街区の外れは《圏内》なのでＰＫ（プレイヤーキル）される心配は

ない。
この翌日の夜から、サチは俺の部屋に来るようになった。俺の近くで、君を死なない、という言葉を聞くとどうにか眠れるのだと言った。俺はサチのためにその言葉を紡いだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆

それから1ヶ月もしない内に大事件が起きた。それは、ギルド資金が目標の金額に届き、ギルドリーダーのケイタが不動産仲介プレイヤーのところに行っている間のことだった。
ケイタを除いた《月夜の黒猫団》のメンバーが話し合い、ケイタが戻ってくるまでに新しいギルドハウスの家具一式揃えてしまおう、ということになった。最前線からわずか3層下の迷宮区で戦うことになった。そこはトラップ多発地帯でもあった。
1時間ほどで目標金額に届いて、さっさと戻って買い物をしよう、という時になって、シーフ役のメンバーが宝箱を見つけた。俺は放置することを主張したが、受け入れてもらえず、アラームトラップが発動した。
3つあった部屋の入口からモンスターの波が押し寄せてきた。緊急脱出しようにも、ここはクリスタル無効エリアに指定されていて、俺を含む全員がパニック状態に陥った。最初に死んだのは、シーフ。次に、メイサーのテツオ、それに続いて、槍使いが死んだ。
俺は完全に恐慌状態し、無我夢中で上位ソードスキルを繰り出して、モンスターを倒し続けた。俺がモンスターに上位ソードスキルを放っているところで、サチがモンスターの波に呑まれようとしていた。助ける余裕はない。
その時、視界の端から銀色に光る槍が飛び込んできた。その槍はサチの目の前にいるモンスターを何体か串刺しにした。俺はその一瞬

の間で、敏捷力をフルにして、呆然とするサチの手を引っ張り背中側に移動させた。これで、俺がモンスターに倒されない限りサチが死ぬことはない。そこからは、俺のソードスキルと謎の銀の槍がモンスターを駆逐していった。

ようやく、モンスターの波が止まったとき、俺は肩の力が抜けてしまった。ＨＰバーは半分以上は残っている。サチも、安堵からなのか、俺の腕の中に飛び込んできて泣き始めてしまった。これまで女子に腕の中で泣かれる状況（シチュエーション）があったことがなかった俺は内心ドキマギしながらサチを慰め続けた。

ふと銀の槍のことを思い出し、槍が飛来してきた方向に顔を向けてみると、慌てるように立ち去る黒いローブの背中が見えた。追いかけたい気持ちはあったが、腕の中にいるサチを放り出すわけにはいかないので、その気持ちを沈めた。

サチはまだ泣き続けていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆

俺とサチはクリスタルで主街区に帰り、宿屋で待つケイタのところに行った。俺が事情を説明しようとすると、意外にもサチがこの役を買って出た。だが、どうやって俺のことを説明するのかと思ったら、サチが俺のことを高レベルのプレイヤーであることを知っていたらしい。後から聞いた話だと、一緒のベッドにいるときに後ろから俺のウィンドウを覗いてしまったらしい。サチの説明に俺はビーターであることを付け加えさせてもらった。

説明の終わった後、ケイタは、

「ビーターのお前が、僕たちに関わる資格なんてなかったんだ」

ただ、一言そう言った。
その言葉が俺の胸に突き刺さった。確かに、俺が関わりさえしなければ《月夜の黒猫団》はずっと安全なミドルゾーンに留まり、無茶なトラップ解除に手を出したりすることもなかっただろう。だから、俺があの3人を殺したことに――――。

「そんなこと無い！」

サチが叫んだ。
あの気弱なサチが叫んでいる。ケイタも面食らったような顔をした。

「キリトは言ったよ。このトラップを放置しようって。それを聞き入れなかった私たちが悪いの」

「だから、何だと言うんだ。キリトが関わったせいで3人が死んだことに変わらないだろう」

「キリトは、トラップに引っ掛かったときも私を守ってくれた。キリトのおかげで、私は生きてるの。だから、キリト1人のせいにしないで」

苦虫を潰すような顔でサチの言葉を聞いたケイタは俺の方に向き直った。

「キリト、俺はお前のことを許しはしない。これ以降、2度と俺の前に現れるな」

「……分かった」

俺は踵を返して宿屋を出て行った。

「キリト」
後ろからサチの声がかかった。
俺はその場で立ち止まった。背中越しでもサチが泣きそうなのが分かる。
「サチ、心配してくれてありがとう。君のおかげで俺の『罪』が少しは晴れてきたような気がするよ」
「うんうん。『罪』なんかじゃないよ。キリトは私のことを――――」
「それは過程の話だ。結果的に俺の慢心のせいでのギルドメンバーは死んだんだ。君たちと初めて会ったときに、俺が嘘を付かなければ、こんなことにならなかった」
「初めて会った時、キリトがポーションが少ないからって……」
「それが嘘なんだ。ポーションはまだまだあったから、君たちと一緒に行動する必要はなかった」
俺は何を言っているのだろう。
こんなこと言えば、サチが傷付くのは分かっていることだ。
俺の懺悔みたいなものなのか。
「俺はソロプレイヤーとして、積み上げたステータスで、俺より弱い君たちを守って、頼られたかったんだ。その快感のためだけに俺は《月夜の黒猫団》に入ったんだ」

驚いているのだろう。失望しているのだろう。
そんな気持ちでギルドに入り、結果、仲間を失わせることになったのだ。

だが、サチから出てきた言葉は予想外のものだった。

「その気持ちを快感って言ったけど、良く言えば、人助けだよね。キリトの中には私を、私たちを守ってあげたいという気持ちがあった。その気持ちがあったから、私たちを守ってくれた。それに変わりはない。そんな気持ちが無くちゃ、初めて会ったときに、守ってくれなかったよね」

まだサチの言葉が続いた。

「だからね、キリト。私は感謝してるんだ。キリトがその気持ちを悪いものだと言うなら、私は何度だって否定するよ。だって、私はその気持ちに救われたんだもの」

俺の目から涙が零れる。この涙は『罪』なのか分からなかったが、俺の気持ちが晴れていくのだけは分かった。
俺がサチを救ったように、サチも俺を救ったのだ。

「ありがとう、キリト。私は君に会えて良かったよ」

サチの感謝の言葉が、俺の胸に染み込んだ。

１―３　第５０層《アルゲード》到達

サチを助けてから時は経ち、今は２０２４年の１月だ。先月の下旬から今月の上旬にかけて、第４９層は突破されて、最前線は第５０層《アルゲード》となった。

確か、第５０層はボスは金属製の仏像じみた多腕型のモンスターだ。そのボスの猛攻に怯んだプレイヤーは勝手に緊急脱出し、戦力が減ったことで死者は増え、またそれに怯んだプレイヤーが勝手に緊急脱出、……という悪循環に陥り、戦線は一時崩壊した。その後に援護の部隊が駆け付けボスは撃破したが、死者が多数で攻略は遅れることになった。ヒースクリフはこの戦線を独力で支えたらしい。これが、ヒースクリフを《ＳＡＯ》最強の男と呼ばれるきっかけとなる。

第５０層の攻略関連で言えば、このくらいだろう。

そういや、もう少しでボス部屋までマッピングが終わるとかなんとか。

◇◆◇◆◇◆◇◆

近況報告、その１。

第５０層に行けることになったことで、エギルがついに店を開店。アルゲードは建物という建物が入り組み、町並みはキリトの言う通り猥雑。その中から１つの店を探すのは困難を極めると思ったのだが、案外いい場所を買い取ったらしく、エギルの店は転移門のある中央広場から西に伸びた目抜き通りを数分歩いたところにあり、す

ぐに見つかった。
見つけた俺は中に入りモンスターの素材を売ろうと思った。さて、ぼっくられるのかと思いきやお客様第１号というわけで、割り増しで買い取ってもらえた。最初は多少の高値で買い取り好印象を与え、後でぼったくる作戦か。
商人エギル、恐るべし！
エギルとの商談はアイテムトレードを使って行った。エギルの店を贔屓するつもりだったので、開き直ったのだ。ただ、俺の名前を見て噴かれたときは容赦なく槍で顔面目掛けてソードスキルをぶっ放してやった。もちろん《圏内》だったのでエギルのＨＰが減ることはない。
ただ、プレイヤー間のアイテムトレードは初めてだったので、操作ミスを連発してしまい、

「なあ、おめぇ、初心者プレイヤーか？」

「悪いね。アイテムトレードもまともにできないプレイヤーで」

と返しといた。全く以てカッコ悪い。
何とかアイテムトレードで済ませて、店を後にした。

リズベットの方は、１度も会ってないが、せっせと店を開店するために資金を集めている頃だろう。

◇◆◇◆◇◆◇◆

近況報告、その２。

えっと……二つ名が付きました。

《孤高の槍使い》

……まあ《閃光》よりはマシかと。
程度で言ったら《黒の剣士》くらいかな。
なぜ、この二つ名が付いたのかと言うと、ソロで動いてたのもあるけど、1番の要因は、誰1人としてフレンドリストに俺の名前が載ってないということ。
ゆえに《孤高》。
異名が付けられた経緯は、攻略組ご用達の酒場から始まった。

「おい、ディンの奴、見なかったか？」
「いや、知らないな」
「俺も知らないな。ってか、アイツに何の用なんだ？」
「俺のギルドに勧誘する」
「まあ、確かに、アイツは強いけど、ソロだぞ？そんな易々と勧誘できるものなのか？」
「ハッ。そこは待遇付きで勧誘するんだよ。そうすれば、奴だって入ってくれるはずさ」
「そんなものか？」
「そんなもんなんだって。これでウチのギルドも戦力アップのはずだ」
「結局は、そこかよ」
「うるせっ。ところで、おめぇ、ディンの奴にメッセージ送ってくれないか？」
「俺のフレンドリストにはディンは登録してないぞ」
「じゃあ、お前は？」
「俺も無いな。ってか、自分で送れよ。俺たちに送らせようとするな」

「俺も登録してないから、こうやって頼んでるんだろうが」
「そう言われても、登録していない以上はメッセージを送ることはできないぞ」
「うーむ、仕方ない。周りの連中に聞いてみるか……オーイ！誰かディンをフレンド登録している奴いないか！少し用があるから、仲介して欲しいんだが！」
「「「「「……」」」」」
「おいおい、マジかよ……」
「誰も登録してねぇのか？」

と、こんな感じの会話が進み、攻略組の中に俺をフレンド登録している人はいないってことが分かった。そこへ、居合わせた名高い情報屋（攻略組から情報を仕入れるためにいた）が「お捜ししましょう」ということを言い、自分の情報網を駆使したが、結局、俺をフレンド登録している人は見つからなかった。
そんな経緯があって、この異名が名付けられた。後日談としては、俺を勧誘しようとしたギルドリーダーは最前線の階層で待ち伏せて、俺を勧誘するという古典的な方法を取ることになった。もちろん、断らせてもらった。
ちなみに、これら経緯はその情報屋から聞いたものだ。

自分の名前をひた隠しにしていた結果がこれだよ。
ハァ～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9752z/

《ソードアート・オンライン》 -転生した主神（笑）-

2012年1月2日06時47分発行